

## 山と僕たちを巡る話

北アルプスの最奥、黒部・雲ノ平での暮らしから垣間見えること。かつてないほど静閑な雲ノ平に発した芸術の息吹。

### 第25話 「アーティストたちの日々」

8月になって以降、まとまった雨が降らない。降水量によっては一晩に10トンほどタンクに水が溜まるのだが、このひと月は全部で3トン溜まったかどうか、という乾きぶりである。もしこれで例年のような混雑が発生していれば、雲ノ平山荘もいまごろ水不足を憂えていたことだろう。

それと同時に、晴れ続きではあるが、雲ノ平は連日ニュースを騒がせている巷の酷暑とは無縁であつて、いつになく涼しい日が多く、近年登山者を悩ましていたブヨの大量発生もない。7月には風雨で散らされた夏の花々に取って代わるように、普段ではあまり目立たないエゾシオガマやヨツバシオガマ、ウサギギクなどが驚くほど大量に咲き乱れ、不思議な光景をも見せてくれたものだ。

要するに、連日すばらしい登山日和が続いている。

そして、コロナ禍の存在感、当初思い描いていた深刻な状況を思うと存外小さなものである。もともと、訪れる登山者の数自体を絞って山荘内の人口密度が非常に低く、スタッフも登山者も基本的な感染症対策を心がけているためでもあるし、巷のように極端に考え方の違う人々の相互監視の圧力が働かないためもあるだろう。山は、おそらくこの

地に雲ノ平山荘が建設された1961年以降でもっとも静かな気配に満たされている。

そんななか、本連載でも以前触れたように、雲ノ平山荘ではアーティスト・イン・レジデンス・プログラムを実施している。このプログラムは、とかくレジャーやスポーツの側面に偏りがちな日本のアウトドアカルチャーのあり方に、より多様な価値観や視点をもたらすことはできないか、という思いからスタートしたものだ。国立公園の諸問題にせよ、言論による提起も重要である一方、楽しさや感性の深度を深めることによつて、創造的に自然環境に携わる人々を増やしていくことが、今後の可能性を切り開くためには不可欠だと僕は考えている。

9月初旬現在、すでに7名のアーティストのうち2名が滞在を終え、3名が滞在中である。

当初1、2名の選出のつもりで公募したのだが、コロナ禍によつて各地で予定されていたイベントなどが中止になるなどの事情もあつてか、非常に才能豊かなアーティストたちからの応募が相次ぎ、同時に山小屋も同じ理由で慢性的に閑散期になることが確実視されたため、予定よりも多い7名のアーティストを選出した。結果、その顔ぶればじつに多彩

である(詳細は山荘Webサイトでご覧いただきたい)。

友禅染の伝統的な着物文化に山の自然のエッセンスを融合させ、新しいデザインを追求する四ツ井健さん。自然音や楽曲から得られたインスピレーションを色彩や造形に置き換えて抽象画を描く渋谷薫さん。登山家としての自然体験を背景に、卓越した造形感覚で生命の形を刻む木彫家の加々見大地さん。ポップで浮遊感のあるタッチと色彩で白昼夢のような山の絵を描く画家のShibusa。木版画表現と、マラソンで培った身体を素材にしたインスタレーションを通して異世界の情景を出現させる若木くるみさん。ステンドグラスのような透明感のある色彩で、独特な装飾性のある風景画を描くsoraさん。

各地への旅をとおして垣間見る人々の心の機微を、暖かなユーモアと静かな眼差しで描く漫画家のマイマイさん。

彼らの制作風景を見ると、人の心というものには、かくも自由であるのかと、改めて考えさせられる。自然のエッセンスを独自の感性で咀嚼し、人々が共有で

きる美や意匠、ユーモアや物語に翻訳し、普段僕たちが見ずごしてしまふ世界の姿を浮き彫りにすることで、現実に対する新しい視点をもたらしてくれる。

また、彼ら一人ひとりの人生の物語を聞くにつけ、じつに一筋縄ではないかない起伏に富んだ道りであることを思い知らされる。これは僕にとつても、どこか他人ごとでないことでもあるのだが、少しだけ他人と違う感性やバックグラウンドを持ち、少しだけ美や人間性への理想を持ち、その理想を妥協できない意地や愛が

あるだけで、気づかぬうちに、ひとりきりで思いもよらぬ高い山に登ることになったりするのである。

アーティストたちと過ごす時間は、僕にとつてかけがえない宝物になることだろう。このことは後日しっかりと記録にまとめたいと思う。

人と自然の関係性、それは人類にとつて永遠に尽きることのない問いかけだ。コロナ禍によつてアウトドアやアートも不要不急の烙印を押されかねない日本の今このごろであるが、コロナ禍や気候変動、それに誘発される世界情勢の変化などによつて人々の不安が募り、グローバル経済や過剰な都市化に大きな疑問符が突きつけられているいまこそ、僕には足元の山や川に遊び「自然のハートに近づくこと」が必要に思えてならない。

考えてみれば、民主主義や人權の父とみなされているジャン・ジャック・ルソーや自然保護思想の黎明期を生きたヘンリー・D・ソローも、音楽や詩を愛する放浪者として半生をすごしたアーティストであり、表現活動を通じていち早く人間にとつての自然の重要性、個人の自立した想像力の大切さを世に問いかけた革命家でもあったのである。路傍に佇む小さな想像力によつて、人類は歴史を築いてきたのだ。



profile  
伊藤二郎(いとう・じろう)

1981年、東京生まれ。雲ノ平山荘経営者。幼少より黒部の源流で夏をすごす。2002年に父・伊藤正一が経営する雲ノ平山荘の支配人になる。2010年、日本の在来工法を用いた現在の雲ノ平山荘の建設を主導し、完成させた

